妙の光（たえのひかり）

通刊85号　**復刊65号**
2009年3月9日（季刊）
角田山妙光寺 発行
〒953-0011
新潟市西蒲区角田浜1056
TEL 0256-77-2025

お稚児さん

毎年四月二十九日の伝統行事「ご判様」にはお稚児さんが出仕して、厳かななかにも華やいだ雰囲気がある。新緑の木々の下、楽人による雅楽の演奏を先頭に山門から本堂まで練り歩き、引き続いての法要で仏様にお花をお供えする役を担う。泣き出す子がいたり、ときにはお供えのお菓子に手を伸ばすやんちゃ者もいて微笑ましい。

その起源は古く、中国から仏教文化の一つとして日本に伝えられ、衣装は、雅楽、舞楽の装束に由来するという。その衣装を妙光寺では一式揃えている。

かけがえのない命に恵まれた子供が仏様とのご縁をいただき、仏様に見守られていることを喜び、今後も健やかで優しい子へと成長を祈る親子の姿に心和まされる。

（稚児募集の案内が9ページにあります）

住職の研修

小川英爾

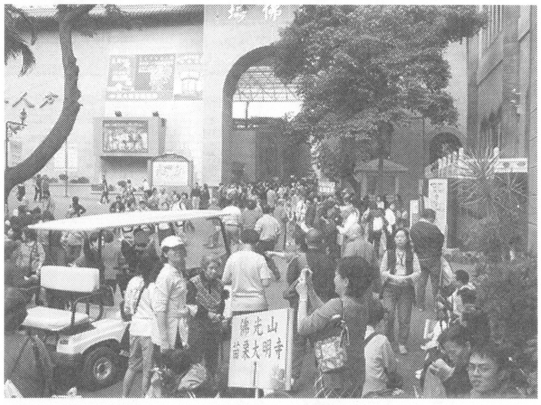
寒い冬のお寺は来客も少なくまとまった仕事に集中したり、気になっているところに出かけたりして過ごすことにしている。この冬は、台湾の仏教が活気に満ちているというので仲間と視察に出かけ、戻ってから座禅断食の修行を体験してきたので、ご報告したい。

台湾の仏教寺院と交流

最近は日本以外の国々で宗教が見直されてきているらしい。そのなかで台湾は昔から道教という宗教が主流で仏教はあまり盛んではないと聞いていた。それが近年新たに起こった四つの宗派が盛んで、特に若い女性が出家して尼僧になる例が多いという。そうした理由を知りたくて南部の高雄の郊外にある仏光山寺と、中部の台中近くの台中禅寺を訪ねた。

事前に紹介をいただいて仏光山寺では二人の尼僧さんが朝から待っていて、二日間つきっきりでお世話いただいた。依（イ）法尼は六十歳ほどか日本の大学で博士号をとった台湾の国立大学の教授という、日本語が達者で元気のいい世話好きな大阪のおばちゃん風。もうおひとりはやや若く、お寺がアメリカに持っている大学出身でアメリカの会社で働いていたという。ここには約三百人の僧侶がいて、七割が尼僧。全員が出家者として独身。宗派全体では僧侶千八百人中八割が尼僧だという。大規模とは聞いていたが、三十万坪の敷地といい組織といい驚くことばかりだった。

日曜日の旧正月明けということもあって、広大な敷地に信者と観光客が入り混じって文字通り老若男女が溢れかえっている。一日では回りきれない数の施設が点在し、本堂の他に観音堂やら座禅堂、図書館、納骨堂、信者の宿泊会館等々七階建てくらいのビルがいくつもある。さらに全国に放送しているテレビ局、宝物館、美術館、僧侶を目指す人の男女別のいく

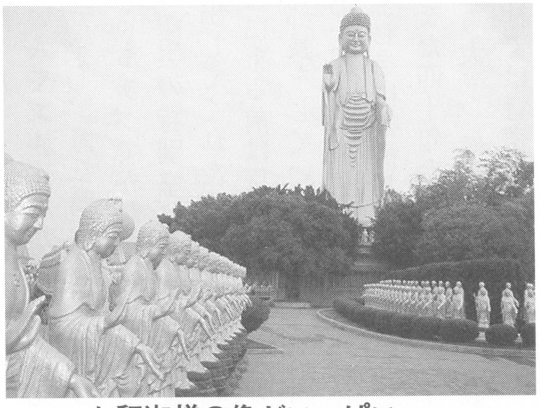


人で溢れる境内

つかの学校、そのうえ仏さまの世界を子供に分かりやすく教えるためという電気仕掛けで動く人形が並ぶ屋内遊園地のようなものまであってこれがまた広い。すべて入場無料で、入口に賽銭箱があるだけ。売店も各所にあって仏教関係の本や数珠、お土産品まで売っている。屋外にもお土産屋、食べ物を売るワゴンもあり、夜には学生が作ったというイルミネーションが輝き、時間にになると飾り付けた車のパレードもある。言ってみれば失礼ながらセンスの悪いディズニーランドのようで、ミッキーやミニーがお釈迦様や観音様といった感じ。

レストランも何か所かあるがすべてこれが精進料理で、こちらは味も見た目も良かった。ここで働く人の大半が信者の奉仕だそうで、皆楽しそうにやっていた。精進料理といえば、私たちは賓客として最上階のレストランで毎回食事をいただいたが、ホテルのバイキングスタイルと一緒で、一見本格的な中華料理だが材料のすべてが野菜だとは信じがたい味で、毎回食べ過ぎるほどだった。お願いして朝の法要後に、三千人収容可能な大食堂で僧侶、宿泊した信者と一緒にいただいた朝食は、胡麻のスープ、パン（ご飯）、野菜炒めという質素なものだった。これを無言で厳格な作法に従っていただくのだが、味もそこそこなうえ、お変わりも自由。「食べるものは美味しく十分戴きましょうというのが私たちの考えです」と説明されたが、尼僧さんが多いせいかなどと想像してしまった。

旧正月の最後なので夜八時から、本堂前の石畳の広大な広場で万灯法会が開かれた。五百人以上はいるだろうか、多くが家族連れで銘々が小さなロウソクを渡されて、スピーカーから流れるお経に唱和する。このお経の声がまたすこぶる美声で、リズムもいい。声のいい僧侶だけ集めた特別編成だという。やがてロウソクに順次点火し、それを足元に置いて皆が脇に移動すると、本堂前に何百もの炎が整然とゆらめく幻想的な光景が広がった。号令がかかるわけでもなく、なかにはお喋りしながらの形式張らない人の動きも心地よかった。


お釈迦様の像がいっぱい……

朝の法要は六時からだった。日本からの僧侶ということで私たちも末席ながら最前列に席を設けられ、中国語のお経本を手渡されたがどこを読んでいるかがかろうじてわかる程度だった。日本で言う小正月だから法要時間が長いと聞いていたが、一時間程度だったように思う。五階建てくらいの高さがあろうかという吹き抜けの本堂の天井に、信者も含めて四百人くらいで

歌うような読経の響きは圧巻だった。

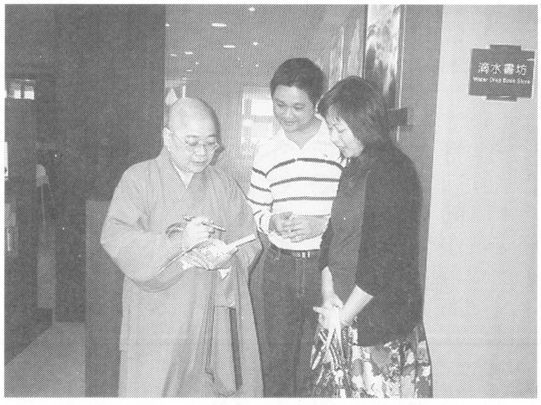
こうした数多くの熱心な信者にとって、元からの道教といまの仏教との違いをどのように考えているのか、寺が運営する南華大学で死生学を教える釈先生から一日目に昼食をはさんでお話を伺った。この二十年あまりで国内の仏教信者は倍増し、国民の六割ほどになった。中国の台頭による国自体の先行き不安や、国内の社会構造の変化が大きな背景らしい。ただ道教と仏教の区別は厳密でなく、道教もやりながら仏教にも熱心で、亡くなった後に枕元で八時間お経を読み続けたり、病院でガンを告知された人たちに僧侶が説法を説くことも増えているという。仏光山寺では生きた人間のための「人間仏教」という基本の徹底していることが、この活気を生みだしていると理解された。

さらに「小川さん、明日は十時半にここの住職があなた方とお会いすることになっています。いい機会なので私が設営しました」と依法尼から突然知らさた。お会いしたご住職は物腰の柔らかい温和な印象の男性で、しかも四十歳という若さに驚いた。選挙で選ばれると聞いてなおびっくり。「日本では学者と僧侶は別という風潮があるようですが、こちらでは一緒です。学問も修行も同時に納めないと身になりません。台湾仏教に尼僧が多いのは男性は家を守るという伝統的な考えがまだ強く、女性は高学歴であっても就職先が少なく、国の将来の見通しも不安定なので学校を終えてからさらに仏教を学ぶ人の多いことが理由でしょう」。こうした話題のやりとりでちょうど一時間の面会を終えた。ご住職は依法尼の教え子だそうで、私達との面会もそのお力によるものと想像され、「仏光山寺は男女平等ですよ」と法尼の言葉も自信に満ちていた。

一泊二日の仏光山寺訪問を終えて昼食をいただいた後、依法尼が学生の車で私たちを高雄市内の別院に案内してそれから駅まで送ってくださるという。お言葉に甘え、訪ねた別院にこれまたびっくり。繁華街に十階建ての立派なま新しいビルで、最上階が本堂、九階が観音堂、他は会議室、研修室、事務室のようで、一階がこれまたおしゃれなレストランに、出版物を売るショップ。本山のようにセンスのないディズニーランドのようなイメージは全くない。すべてが銀座にあってもいいような雰囲気なのだ。レストランの五十はあろうか思われる席は若い人や家族連れが一杯で、見回すとピラフ、スパゲッティー、何々鍋といった感じの品を食べている。これらもすべてが精進料理という。愛想のいい女性支配人が奥の特別室に案内してくれ、お粥、お菓子、お茶を出してくれた。五十前かと思われる彼女も信者で、ここに来る前は日本の電機メーカーの台湾シャープで人事部長をしていたそうで日本語ができる。ご主人が銀行の支店長だから収入は十分あり、ここでの給料はそのままお寺に寄付しているとのこと。実は仏光山寺の宗派はまだ四十年余りの歴史しかないのに、国内に小学校から大学、僧侶専門学校までと、テレビ局以外にも新聞社では日刊紙を発行し、末寺を

数百。アメリカとオーストラリアに大学と、日本を含めた世界にも末寺を持つ。他の宗派も似たようなものらしい。これらは檀家制度などではなく全て信者の自発的な寄付によって成り立ってきたというから、その信頼の篤さにただただ敬服するばかりだ。高雄の別院の書店で三十前後の夫婦が依法尼の姿を見つけ「今あなたの本を買ったので、サインしてください」と言ってきた場面にも遭遇した。

次に訪ねた中台禅寺は「二〇〇二年台湾建築賞」というさらに巨大な建物で、日本の国会議事堂を斬新にしたような形と規模だった。事前準備がなく詳細は聞けなかったが、内部は開放的で気持ちのいい風が吹き抜けていたのが印象深かった。こうした台湾仏教の背景に「台湾では昔から企業でも個人でも利益を得たら恵まれない人に還元する習慣が根強く、お寺も医療や福祉、教育活動にとても力を入れていることが支持されている」。「台湾の企業経営者は信仰熱心な人が多く、お寺に寄付するお金も半端でなく多い」という話しも耳にした。僧侶は結婚せず、修行と勉強に真剣で、社会救済に熱心なうえその活動は国内外を問わない。寺のあるべき一つの方向性を感じつつも、日本との隔たりはあまりに大きいと痛感させられた思いで四日間の旅を終えた。



サインの求めに応じる依法尼

座禅断食修行体験

土曜の夕食を軽めにして日曜は朝から水以外絶食のうえ、松本の温泉旅館に夕方六時の集合から座禅断食会は始まった。野口法蔵師という臨済宗の僧が指導者で、私が参加した回で百何回目かになるときいた。野口師とのご縁は十年来になる。以前は新潟の津川にいたからよく妙光寺に寄られ、昨年も新潟がんセンターの医師と一緒に来られたので秋の講話をお願いし、その際にこの座禅断食の話を聞いたのがきっかけだった。痩せたいからではなく、修行の形として興味があってのこと。

貸し切りにした小さな旅館の大広間に四五人が全国から集まった。日程説明によると一日目は夜九時半までで、基本は二十分の座禅と四十分の全く自由な休憩時間を繰り返し、三日目までに十回の座禅がある。その間二日目の昼ころに野菜ジュース一杯とあとは水、お茶、塩だけしか口にしない。参加者の六割が女性で、世代は親に連れられた女子高生から七十歳くらいまでと幅広く、私のように初心者から十回以上という人もいた。目的の多くは病気を治したいというもので、ノイローゼや過食症といった精神の病から、肝炎、強度のアトピー等々様々。

それぞれが休憩時間に健康になるための情報交換を熱心にする姿を見て、いかに病む人が多いのかと考えさせられた。

二十分の座禅が辛いという声が多く聞かれたが、私にとっては普段のお経で慣れているせいかむしろ楽しく感じられ、さらに三日間電話も来客もない時間は実にありがたかった。不安だった空腹もそういうものだと思えばさほど苦にならず、他の断食道場と違い座禅することでかえって精神統一ができる点で効果が高いのだと説明され納得できた。こうした断食の効果や、健康であるための日常生活の話が折にふれて野口師からあり、医者との共同研究を継続しているというだけあって合理的で理解できる内容だった。それでいえば、普段いかに食べ過ぎているかを反省させられた。全体の参加者のなかには、西洋医学に限界を感じている医者がとても多いというのも頷ける気がする。

夜は空腹による疲労感からよく眠れるが、三日目の朝は起きづらかった。こうした体調の変化は個人差があるそうだ。あっという間の三日目を迎えて朝九時半、十回目の座禅を終えると食事になる。まず水をどんぶり三杯、続いて大根を煮た汁に梅干しを二～三個を入れこれをどんぶり三～六杯。さらに中皿に大盛りの生野菜に味噌をつけ、他にもチーズ、羊羹、パン、ヨーグルト、リンゴ、ジュース、ミルク紅茶等々。やがて皆がトイレに駆け込み、これを二度三度と繰り返し、俗に言う宿便が出る、というのだが・・・。私も同室の人も出たのは水溶性のものばかりで固形物は出てこなかった。これも個人差があるという。

やがてすっきりした顔で全員が感想を述べ合って十二時過ぎに解散となった。なるほど確かに爽快感があって、体も頭もきりっとした感じがある。車での帰り道、激しい雪の高速道路をあまり好きではない運転ながら、三時間半休憩しようとも思わず疲れを感じることもなく、むしろ高揚した気分で戻った。断食のお陰か座禅のせいか、両方の相乗効果かもしれない。

断食明け三日間は普段の半分の食事量を野菜だけで、酒と肉類は一週間厳禁と指示された。これを破ると新鮮になった腸からの吸収が良すぎて、体に受けるダメージが大きいという。ありがたいことにあまり欲しいとは思わなかったことも、断食の効果かも知れない。理想的には半年に三回の断食をすると、小食で健康的な食生活に慣れることで心身の健康が保たれるそうだ。健康体だとそこまでして酒を止めたいと思わないだろうが、健康に不安があると切実に考えるだろう。毎月開催しているこの修行が三か月先まで予約でいっぱいというのも頷ける。

二年前のフェスティバル安穏の講師をお願いした広島大学で宗教学を教える町田宗鳳先生は、長年禅修行をされた元僧侶だが「私も野口さんに教わり、自分なりにアレンジしていま広島で皆さんを集めてやっていますよ」と言われた。親しみやすく効果的な修行が寺に求められていることを知るいい機会だった。

信心

夫を支えて七十年

新潟市巻　河野　アキさん（九十歳）

アキさんはこの一月に七十年連れ添った夫、與二郎さんを看取った。一つ年上の與二郎さんと二十一歳で結婚したものの、すぐに徴用だ戦争だと離れた暮らしが長かったので寂しさには慣れているという。二人は共に実家が妙光寺檀徒で親同士が兄妹の従兄弟だった。

與二郎さんは早くに父親と死別したせいか若い頃は気持ちの荒れるところもあったが、アキさんが持ち前の明るさと優しさで支えてすっかり穏やかな人になった。長年工場勤めしたがあるとき薬品で火傷を負い、定年を前に辞めざるを得なかった。その後の生活は年金と長男夫婦が支えた。十五年前、自転車で行った日帰り温泉の帰り道、道路に飛び出した子供を避けるために急ブレーキをかけて転倒。「将来のある子供に怪我させてはいけないと必死の思いだった」と後に語っていた。救急車で運ばれ頚椎損傷で入院。これを機に老化が進み、順子さん（長男の嫁）の応援を得てアキさんが付きっきり介護した。病院でも「仲の良い夫婦ですね」といつも言われたそうだ。

二人の両親ともに信仰熱心だったせいか、アキさんは子供心にもお盆などのお寺参りが大好きで、いまだに思い出だという。復員した與二郎さんとの生活が落ち着いてから仏壇が欲しくなり、近所の店で中古品のお洗濯したものを購入した。同じ頃アキさんの祖母の実家に嫁いだ姉から「ご縁でうちに三体あるお祖師様（日蓮聖人）像の一つを上げる」との話がきた。「祖母の実家にはよく遊びに行き、なぜか幼心にも気にかかっていた一体を迷わず戴いてきました」。以来、長男と協力して建てた家でずっと大切にお守りし、「親から耳で教わったお経ですが必ずお経本を読んで、毎日家族や親族の安全をお祈りしています」と。

数年前に與二郎さんは病床から墓とご本尊のお曼荼羅を希望され、実現したときはとても喜んだ。その前、妙光寺の本堂建て替え工事には積極的に寄付を申し出られた。「貧乏だったけど初代だから、お仏壇、仏具、お墓、ご本尊、この間にお寺が良くなったりと、一つひとつ揃えて来るのが楽しみだった。身延山へも御前様に連れて行ってもらったし。いまは若い者がよくしてくれるので本当にありがたい」と、ニコニコと穏やかに話すアキさん。神経痛が痛いそうだが、耳も目も何より記憶がしっかりいる。

寺の動き

和やかだった正月行事

年末年始は雪もなく比較的穏やかな天気に、大勢の参拝者でにぎわいました。

除夜の鐘では二百人余りが鐘を撞き、用意した甘酒、こんにゃくもきれいにからになるほど。寒い中で並ばなくてもいいように昨年から整理券を用意しましたが、皆さんがこれにも慣れてスムーズにいきました。

正月一、二日は年始の方々が例年通りにおいでくださいました。一日の夕方、建築関係の仕事という埼玉の若い三人連れが「仕事で来ているのですが、妙光寺に行ってみなさいと教えられました。雰囲気のいいお寺ですね」と訪ねてきました。年始客が途切れたときだったので、お茶を勧めしばし話し込みました。

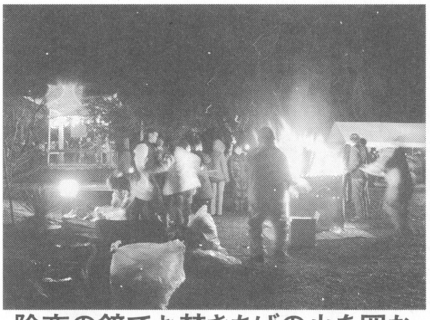
冬の恒例になった地元角田浜の次世代檀信徒による夫婦で参加するお経練習会は三回予定しました。一回目の日に角田浜でお通夜がありそちらに出席。二回目は予定通りで三回目終了後、鎌田上人の母親差し入れの本場キリタンポ鍋を囲んでの懇親会で和やかに盛り上がりました。

＊お釈迦さま像の修復

昨秋から修復中のお釈迦様像は現在滋賀県の仏師のもとで作業が進行中です。十分な時間が欲しいとの石川仏師の希望で、お彼岸までの当初の予定を遅らせ四月下旬までかかることになりました。新たに金泥（きんでい）書きを施すなど、立派にお化粧直しして戻りますので期待してお待ちください。

＊安穏廟「杜の安穏」現況

申込が一杯で昨年十一月に受け付け停止した「杜の安穏」ですが、どうしてもとキャンセル待ちの方が数件あります。



除夜の鐘でお焚きあげの火を囲む

今後も希望者は増えこそすれ止まることはないと思われますので、敷地の確保を含めて何とかならないか役員会議で検討したいと考えています。この三月発売の雑誌『通販生活』で紹介されます。昨秋掲載の予定だったので取材協力したのですが、都合で遅れたそうでいまさら掲載を断れないものですから。

＊参道入口を整備

市道から駐車場に至る参道入り口の松の木が、松くい虫で枯れてしまいました。墓地が丸見えになってしまうので、道路沿いに盛り土をして植栽による整備を行いました。予算が不十分で大きな木を植えることができず、成長を待つことにします。

最近また松枯れが増えており、薬剤による対策も経費的に追いつきません。原因と言われる線虫のマツノザイセンチュウに強い松の苗木二十本を、檀徒で新潟市秋葉区の保科さんから寄付いただき境内に植えました。可愛らしい苗木で立派になるのは百年後です。でも植えなければ将来はありません。

各種ご案内

＊ご判様

三百年は続くと言われる伝統行事の「ご判様」を四月二十九日に催します。日蓮聖人が遺された判（印鑑）で往時をしのび信心を高めるというもので、昭和三十年代までは全国から参詣の信者でごった返しました。今その面影しかありませんが、地域に新緑の季節を告げる行事として続いてきました。市内の書店で販売中の『新潟市の一二〇年』という本に、昭和三十五年当時の様子が紹介されています。また右の写真は同じ昭和三十五年のお稚児様です。右はじの童子が現住職で、他に写っている皆さんもお元気で、そのお一人の佐藤久枝（東京）さんが保管していた写真です

今年も寒百日間の荒行を終えたお上人の水行と特別お加持があります。新緑の木々の下、雅楽と稚児の行列は荘厳です。また往時は境内に数多くの露天が並びましたが、今年一軒だけ茶店が営業します。どなたでも気軽にお参りください。

今年の当番は山本地区、のぼり立てと当日の輿かつぎに角田地区の皆様宜しくお願いします。

昨年のお練り風景

昭和35年のお稚児さん

・祈願、回向のご案内

ご判様の志納袋を檀信徒にお届けします。当日十時半までにお参りを兼ねてお持ちいただくか、事前にお送りください。家内安全や身体健全といった祈願と、特別回向は十一時の大法要で読み上げしてお札を差し上げます（遠方の方には後日郵送します）。施餓鬼塔婆は午後一時半の法要で塔婆をたてて読み上げします。

・お稚児さん募集

お練り（行列）と法要に出仕するお稚児さんを募集します。四～六歳くらいの男女どなたでも、先着十名まで。衣装一式はありますので、当日は白足袋と五千円をご用意ください。法要のあとで発育健全のお加持をして、そのお札、記念品、記念写真、昼食がつきます。付き添いの服装等詳しくは直接お知らせします。

＊　秋までの行事ご案内

今年は行事の計画が早くに決まったり、会場として借りたいという申し込みも多かったりして、計画が盛りだくさんで楽しい年になりそうです。今からご予定いただき、ぜひご参

加ください。（主催者名が書いてない場合は妙光寺の行事です）

・住職の講演

三月十六日（月）午後一時三〇分

新潟市江南区　老人福祉センター横雲荘

「いかに生きるか―悔いのない人生、自分らしい最期―」

江南区社会福祉協議会ボランティアリボンの会

電話〇二五―三八五―一一三九

定員に達して受付停止という情報もあります

五月二十七日（水）一時三〇分　新潟市総合福祉会館

「老いと死を見つめて、充実した生を考える」

ＮＰＯ法人あいごの会　電話〇二五―二八五―一五六一

・春の鎌倉日帰り参拝の旅　四月五日（日）

別紙ご案内の通り、昨年好評でした関東地区を会場にした日帰りの巡拝です。どなたでもかまいませんので、遠足の感覚でお誘いあわせご参加ください。最初にお参りする円久寺さんの松脇住職ご夫妻は、住職が仲人をさせていただいたお寺です。

・「うさと展」　四月二十四日（金）～二十六日（日）

タイ在住の〝さとううさぶろう〟さんがデザインし、タイの綿や麻、絹を手織りで草木染めした洋服の展示販売会。好評で四回目の開催です。主催「うさとジャパン」

・「スーザン・オズボーン　いのちのコンサート・ＳＡＫＵＲＡ」　四月二十五日（土）

冬季長野オリンピック閉会式で歌って感動を呼んだアメリカ人歌手スーザンオズボーン。自然派歌手、ヒーリングの女王とも称され、その澄んだ声量のある歌声は世界中のファンを魅了しています。アメリカに住み、日本公演ツアーの中で響きのある妙光寺本堂で歌わせて欲しいと、関係者からの依頼で特別に実現しました。アカペラ（楽器もマイクも使わない）で歌う声がどのように聞こえることでしょう。主催「まきおやこ劇場」

・「天野尚のネイチャーワールドとソプラノの出会い」　五月十六日（土）

アマゾン、ボルネオ、佐渡の風景写真で世界的なカメラマンとなった天野尚さんの写真を、スライドで映写しながらソプラノの生の歌声を院庭で聞きます。旧巻町漆山出身の天野さんは住職と古い友人で、当日は撮影の苦労話などを語ります。主催「新生現代寺子屋の会」

・第二十回フェスティバル安穏　八月二十九日（土）

二十回記念としてゲストにおすぎさんと小室等さんのお二人を迎えることが決定しました。〝おすぎとピーコ〟のあのおすぎです。大変真面目な方で、人の生死についてきちんと語られます。小室等さんは七十年代のフォークソング歌手として活躍され、いま六十五歳になって詩人の谷川俊太郎さん

や作曲家の故武満徹さんらとの交流を通した新しい曲も歌っています。お二人の語りと歌で、人の繋がりや人生を考える場になることでしょう。

・身延山七面山団体参拝旅行

十月四日（日）～六日（火）二泊三日

隔年で主催する本山への参拝旅行です。大型バス一台を予定し、関東方面からは身延山集合解散で参加できます。期日は決定で、詳細は次号でご案内します。

・人形古浄瑠璃

ワークショップと上演（予定）十一月一日（日）

浄瑠璃は三味線と語りに合わせて演じられる人形劇で「文楽」ともいわれますが、中でも古い時代の古浄瑠璃と呼ばれるなかの演目を三〇〇年ぶりに復活して、新潟市の土と水の芸術祭（申請中）の一環に上演を計画したものです。詳細は改めてご案内します。　主催「越後猿八座」

・お会式と第八回戒名授与式　十一月八日（日）

日蓮聖人七二八遠忌の法要と、生前戒名の授与式です。生前戒名については改めてご案内します。当日の法話に、大島龍穏上人をお願いしました。大島師は神奈川県警で鬼刑事と呼ばれた元警察官。三五年勤務して定年退職後、日蓮宗の僧侶になりました。『鬼刑事、僧侶になる』（サンマーク出版）の著書が新聞、テレビで話題を呼び、お話も大変面白い方です。

（コンサートなどのイベントは、妙光寺が法務に支障のない範囲で外部の団体に会場を提供して開催するものです。これは団体にはとって雰囲気のいい会場を行政のような制約が少なく使え、妙光寺はお寺にご縁を感じてもらえる若い世代が増えることを期待できる。こうしたお互いにとって好都合という関係で成り立っています。

＊お経のCD完成

皆さんのお経練習用に住職のお経を録音したテープ、CDを販売していましたが、希望のところで止められないとの声があり、このたび新たに録音したCDを作成しました。おわけしているお経本に対応して、どのお経からでも始められる機能をつけ、練習用にゆっくり読んでいます。ご希望の方はお申し出ください。

一五〇〇円　送料五〇〇円（郵送ご希望者は二〇〇〇円同封でお願いします）

あんのんのページ

相談続く中で

杜の安穏も満杯で、現時点では新規の申し込みは受け付けていません。しかしお寺ですからどんな方でも相談には応じています。最近、親が病気でお墓は後で考えることにして、檀徒になってぜひ葬儀だけでもお願いしたいという話が続きました。妻の両親に妙光寺を薦められたというTさんと、以前から出入り業者のYさんです。二人とも若い男性で、断ることもできずお受けしました。また、妙光寺を知らず数日前に親の葬儀を葬儀社紹介のお坊さんを頼んで済ませたが、今後はその人に頼みたくないのでお世話になりたいと言って来た子供のない若い夫婦もありました。こうしたなかで杜の安穏の増設が求められていることを痛感し、敷地の確保が可能かどうかから役員会で検討することにしました。

葬儀社が紹介するお坊さんの話は東京ではよく耳にします。頼む側からは安く上がって良かったとか、お経だけ読んで法話の一つもなくさっさと帰ったとか色々言われます。それが新潟市内でも聞かれるようになり、評判も同様にさまざまです。その一方で、昔からの菩提寺（檀徒になっているお寺のこと）にお願いしたら高額なお布施の請求書が届いたという話も聞いたことがあります。新潟市内でのことです。これはどうあるべきかだと決められることではなく、頼む側が何を期待しているのかによって感じ方が違うので難しい問題です。言えることは、葬儀は非日常的なことなので限られた情報だけで判断するのではなく、幅広い見識で考える必要があることと、そのために信頼できる相談相手が不可欠だということではないでしょうか。

前のページでお知らせしましたが、八月の第二十回フェスティバル安穏のゲストにおすぎさんと小室等さんが決まりました。松本・神宮寺の高橋ご住職に小室さんをお世話いただき、小室さんからおすぎさんと一緒にとお話をいただきました。お二人の楽しい中にも含蓄のある話と歌であっという間に時間がすぎることでしょう。他にも今年はイベントが目白押しです。どうぞ気軽に参加してください。

「杜の安穏」のアキニレの木の枝が付きすぎて風の影響を受け、傾く木もでてきたので枝払いをしました。いっそう明るい雰囲気になります。

寺庭から

いつでもここにあるよ

小川　なぎさ

世の中の大きな変化をこんなに身近に感じることは今までにあまり無かったのではないか、大変なことになってしまったと感じる今日この頃です。それに比べ自然の営みは確実に三寒四温を繰り返して、毎年変わることなく春に向かっています。そのことがせめてもの救いです。

冬の間、住職は勉強とやらで精力的に動いていましたが、私はというと寺の留守番をしながらおこもり状態でした。読書、昼寝、ニンテンドーのゲーム、犬の散歩などの日課に加えて、思索にふける毎日でした。テーマは色々〔笑〕。気持ちの病がまだ治らずに薬が必要な状況にあって、このおこもり生活はうつうつと妄想なども引き起こし、コタツにひっくり返って頭をかきむしり、本を読んでは疲れてボーとして昼寝。このまま私は何処にいくのよーと悩むこともありましたが・・・。かえりみて己をしるべし。それから前進あるのみという心境です。春、新年度ですものね。

アメリカのサブプライム問題から端を発した金融不安は、世の中をがたがたにしてしまいました。国の土台となる政府すら揺らいでいます。バブルの時はどこかよその出来事という感じがしましたけれども。今度は安穏基金も影響を受けました。まだ取り返しのつかないことにはなっていませんからご心配は要りません。またどうなろうともお寺は七百年の歴史がありここまで続いてきたのですから大丈夫です。それよりも人間の心が、お寺とか宗教というものの本質から離れ経済や社会の変化に同調していってしまうのではないか、という恐怖があります。お寺が世の中から必要とされず消えてしまうのかとか。

明日はどうなるかわからないという不安をどの世代も感じながら暮らしています。厳しくなってゆく経済状況のなかで、法事や葬儀の簡素化は当然のことだと思います。気持ちがどこか殺伐としてくるのも私も感じます。

このような世の中だからこそ仏様の教えがここにあり、どんな時代も生き抜いてお寺は続いてきたことに必ず意味があるはずだと信じ、自分の力ではどうにもならない世の流れのなかでは、私は祈りつづけることしか出来ないのだろうと思っています。

もうすぐ暖かい季節がやってきます。お散歩においで下さい。境内や本堂はいつでも開いています。

行事案内

◆**春のお彼岸法要　三月二十日（祭日）**

午前十時半　安穏廟法要

十一時　春季彼岸会中日法要

十二時　おとき（どなたでも当日受付で申込みいただけます）

午後一時　お説教（住職）

お彼岸は春秋二回、陽気も良くなり昼夜の時間が同じになるこの日、心の偏りをなくして仏さまの教えを守りましょうという古くからの行事です。彼岸とは仏さまの住む向こう岸の意味で、私たちが住むこちらの岸が此岸です。間を流れる川が三途の川。仏さまの住まわれる世界に行くために生前からの修行を欠かさない、それを強調する一週間が入りから明けまでの七日間です。本堂へのお参りもお忘れなくどうぞ。

◆**春の鎌倉日帰り巡拝　四月五日（日）　参加申し込み受付中**

◆**スーザン・オズボーン　いのちのコンサート・SAKURA　四月二十六日（土）**

◆**ご判様　四月二十九日（祭日）**

午前八時半　受付開始　詳細は別紙で

◆**天野尚のネーチャーワールドとソプラノの出会い　五月十六日（土）**

あとがき

これを書いているいま、映画「おくりびと」のアカデミー賞受賞が話題です。この原作『納棺夫日記』の作者、青木新門さんには平成七年秋のお会式に、妙光寺でお話いただいたことをご存じの方は少ないでしょうね。一気に有名になられてしまいました。あのとき、小学生の次女が書いたホタルの詩を素晴らしい感性だと褒めていただきました。人の死と生は密接に絡み合い、切り離しては考えられない大切なことというメッセージが、この殺伐とした社会でようやく見直された点をとても嬉しく思います。亡くなって何も語らない人たちに対する優しい思いを、多くの人が納得のいく形でもう一度定着して欲しいものです。でもなぜアメリカで認められないと話題にならないのか、そこが不思議です。

春がやってきて嬉しい反面、炬燵にもぐってゆっくり出来なくなるかと思うとがっかりです。一方で東京の大学に遊学中の三女がこの春卒業して戻り、手伝ってくれることになりました。少しは楽になるでしょうか。　小川